

第5次レッドデータブック：
絶滅のおそれのある日本の野生生物
The 5th Red Databook, Threatened wildlife of Japan

ヒクイナ

Zapornia fusca erythrothorax (Temminck & Schlegel, 1849)

平野敏明（バードリサーチ）

絶滅のおそれのある野生生物の選定・評価検討会 鳥類分科会



令和8（2026）年3月



特に文献内で別途指定がない限り、この文献はクリエイティブ・コモンズ 表示 4.0 国際ライセンスの下に提供されています。

<https://creativecommons.org/licenses/by/4.0/deed.ja>

種毎の解説を引用する場合には以下のように記述してください。

引用表示：平野敏明，2026. ヒクイナ. 環境省（編）第5次レッドデータブック：絶滅のおそれのある日本の野生生物，pp. 686-691.

Citation: Hirano, T., 2026. *Zapornia fusca erythrothorax* (Temminck & Schlegel, 1849). In: Ministry of the Environment, Japan (ed.), *The 5th Red Databook, Threatened wildlife of Japan*, pp. 686-691.

ヒクイナ

Zapornia fusca erythrothorax (Temminck & Schlegel, 1849)

カテゴリー判定結果		準絶滅危惧 (NT)			①②
基準 A: VU 未満	基準 B: VU 未満	基準 C: VU 未満	基準 D: VU 未満	基準 E: —	
生息状況の推移から見て、種の存続への圧迫が強まっていると判断されるもの。 具体的には、分布域の一部において、次の傾向が顕著であり、今後さらに進行するおそれがあるもの。 ①個体数が減少している。 【判断理由】 全国鳥類繁殖分布調査の結果、2010 年代において繁殖が確認されたメッシュ数は 1990 年代よりわずかに増加していたが、1970 年代と比較すると大幅に少なかった。同調査において、日本海側の新潟県や山形県、岩手県、青森県、北海道では 1970 年代の調査で本種の生息が確認されていたものの、2010 年代の調査では生息確認メッシュが得られなかった。 ②生息条件が悪化している。 【判断理由】 近年、大分県において、宅地開発、圃場整備、水田の乾田化などにより本種の生息環境が悪化しており、観察頻度が減少している。					
評価分科会： 鳥類分科会					

概要

本亜種は、北海道、本州、佐渡、四国、九州で繁殖し、冬鳥あるいは留鳥として生息する。おもにスゲ類やヨシなどの湿地性植物が繁茂する池沼や河川の水深約 10 cm 以下の水辺、イネの生育する水田などに生息する。鳥類繁殖分布調査 1978 では九州から北海道まで広く生息・繁殖が確認されていた。しかし、1990 年代の全国鳥類繁殖分布調査では 50 メッシュで記録されただけであった。さらに、2016-2020 年の全国鳥類繁殖分布調査では関東以南の太平洋側や九州地方での生息状況が回復傾向にあることが分かったが、日本海側や東北地方では生息状況が悪化したままで、北海道では生息地が確認されなかった。一方、越冬期の生息分布は 1970 年代には九州地方の一部に生息が確認されていただけであったが、2010 年代では関東以南の主に太平洋側で著しい分布拡大が認められるとともに、一部の地域では越冬個体数の増加も確認されている。

協力者： 植田睦之（バードリサーチ）

基礎情報

【形態】

全長 22.7 cm (榎本 1941)。後頭部から体上面は暗緑褐色、前頭部から首、胸、腹部上部が赤褐色をしており、脇から下尾筒は暗緑褐色で白色の横縞がある。嘴は黒褐色で脚は赤色をしている。雌雄同色だが、メスのほうが胸から腹部上部の赤色味が少ない。

【生活史】

本亜種は日本では夏鳥（北海道、本州北部）あるいは留鳥（本州中・南西部）として生息・繁殖する（日本鳥学会 2012）。生息環境は、水田や池沼、河川のおもに水深 10 cm 以下のイネやスゲ類などの植物が生育する湿原や水辺に生息する。関東以南および太平洋側の地域では留鳥として生息する。繁殖期（5 月から 8 月）にはつがいで生息し、雄は「クイナの叩き」として知られるキョ、キョ、キョ、キョ、コン、コン、コン、コンと次第にテンポが速くなる鳴き声で日中や夜間に鳴く。秋冬期にはおもに単独で生息する。秋冬期や早春にはコッコッコなどと鳴きながらスゲ類やイネ科植物が茂った草地を歩きながら採食する。近くに別の個体が生息する場合にはカイツブリに似たギョルルルーと聞こえるやや大きな声で鳴く。5 月ごろから 8 月にかけて地上の植物の間やイネの地上 20 cm ほどの高さの株のなかに周りの植物を使って碗状の巣を造り、産卵・抱卵する。ヒナは全身が黒い羽毛で覆われており、孵化した直後から親鳥について歩きながら育雛される。北日本の個体は、冬季には暖地へ渡る。食性は、昆虫類やミミズ、小型の魚類、植物の葉や芽などを食べる。

【生息環境】

おもにスゲ類やヨシなどの湿地性植物が繁茂する池沼や河川の水深約 10 cm 以下の水辺、イネの生育する水田などに生息する。ときには海拔 1500 m 前後の高層湿原にも生息する。

生息環境区分：	【陸域_中標高地_低標高地】草地，田地・畑地，耕作放棄地，農業用水路，湿地・湿原・細流，河川中流域，ため池・池沼
	【陸域_平地部】田地・畑地，耕作放棄地，湿地・湿原，河川中流域，河川下流域，小河川，ため池・池沼
国土地域区分：	(1) 奥山自然地域，(2) 里地里山・田園地域，(4) 河川・湿地地域，(7) 島嶼地域

【分布域】

北海道、本州、佐渡、四国、九州で繁殖し、冬鳥あるいは旅鳥として御蔵島、八丈島、対馬、種子島、屋久島に渡来する（清棲 1978）。鳥類繁殖地図調査 1978 では、九州から北海道まで広く生息が確認されており、関東地方や愛知県のほか石川県や新潟県などの日本海側や岩手県、宮城県、北海道でも繁殖確認メッシュが記録されていた。

現在の生息状況

【分布域の現況】

2021 年に発行された全国鳥類繁殖分布調査報告によると、ヒクイナの 2016-2021 年の繁殖期の生息状況は A（繁殖を確認）が 21 メッシュ、B（繁殖は確認できなかったが繁殖の可能性はある）が 64 メッシュ、C（繁殖の可能性は何ともいえない）が 38 メッシュで、合計 123 メッシュ（沖縄・種子島等を含む）で生息が確認された（植田・植村 2021）。繁殖期の生息確認メッシュ数は、1970 年代の生息確認メッシュ 159 メッシュより少なかったが 1990 年代の生息確認メッシュ数 50 メッシュより大幅に増加していた。しかし、2010 年代では 1970 年代に記録があった本州中部の内陸部や東北地方では記録されたメッシュは極めて少なく、北海道では生息が確認されたメッシュはなかった。一方、2023 年に発行された全国鳥類越冬分布調査報告 2016-2022 年では、関東以南の主に太平洋側に分布が著しく拡大していた（植田・植村・山崎 2023）。

【生息地の現況】

農業用溜池や洪水対策の遊水地など水深の浅い湿地環境が維持されている場所ではヒクイナの生息が確認されている一方で、河川では洪水対策用の護岸工事や砂礫地の撤去などによって本種の選好する湿地性の植物が繁茂する環境が減少している。さらに、水田では除草作業や乾田化などによって繁殖の攪乱や餌資源の減少などの阻害要因が継続的に存在する。

【個体数の現況】

主に関東以西の太平洋側では 2010 年代以降になると生息地が増加傾向にあり（植田・植村 2021）、良好な湿地性草原が広がる地域では個体数も増加傾向にあることが報告されている（渡辺・平野 2011）。個体数の増加や生息地の分布拡大は繁殖期ばかりでなく、冬期の個体数増加や分布拡大の傾向がある（たとえば籠島 2022、植田・植村・山崎 2023）。さらに、栃木県南部の渡良瀬遊水地では 2022 年 1 月に半径約 100 m の範囲内で少なくとも 6 羽の越冬個体を記録した（平野未発表）。一方で、日本海側の福井県などでは繁殖期・冬期を含めて生息数は少ないままであることが報告されている（出口 2017）。

存続を脅かす要因

河川改修による水辺のヨシやスゲ類などの植物の減少による生息環境の悪化、農作業（乾田化、干し上げ）による餌資源の減少。

要因の区分：	（過去）	湖沼開発，河川開発，湿地開発，圃場整備
	（現在）	湖沼開発，河川開発，湿地開発，圃場整備

特記事項

地球温暖化の影響で北日本での冬季における分布拡大や個体数が増加する可能性がある。

旧レッドリストカテゴリーと掲載名

第4次 2020:	ヒクイナ	<i>Porzana fusca erythrothorax</i>	NT
第4次 2019:	ヒクイナ	<i>Porzana fusca erythrothorax</i>	NT
第4次 2018:	ヒクイナ	<i>Porzana fusca erythrothorax</i>	NT
第4次 2017:	ヒクイナ	<i>Porzana fusca erythrothorax</i>	NT
第4次 2015:	ヒクイナ	<i>Porzana fusca erythrothorax</i>	NT
第4次:	ヒクイナ	<i>Porzana fusca erythrothorax</i>	NT
第3次:	ヒクイナ	<i>Porzana fusca erythrothorax</i>	VU
第2次:	—	—	—
第1次:	—	—	—

都道府県レッドリスト・レッドデータブック掲載状況（令和6年度末時点）

【北海道】情報不足(Dd), 【青森県】最重要希少野生生物(A ランク), 【岩手県】絶滅危惧Ⅱ類, 【宮城県】絶滅危惧Ⅰ類(CR+EN), 【秋田県】絶滅危惧Ⅱ類(VU), 【山形県】絶滅危惧ⅠA類(CR), 【福島県】絶滅危惧Ⅰ類(CR+EN), 【茨城県】絶滅危惧ⅠA類, 【栃木県】絶滅危惧Ⅱ類(B ランク), 【群馬県】絶滅危惧ⅠB類(EN), 【埼玉県】絶滅危惧ⅠA類(CR)(繁), 【千葉県】最重要保護生物(A), 【東京都（本土部）】絶滅危惧ⅠA類(CR), 【東京都（区部）】絶滅危惧ⅠA類(CR), 【東京都（北多摩）】絶滅危惧ⅠA類(CR), 【東京都（南多摩）】絶滅危惧ⅠA類(CR), 【東京都（西多摩）】絶滅危惧ⅠA類(CR), 【神奈川県】絶滅危惧Ⅰ類(繁殖期), 【新潟県】絶滅危惧Ⅰ類(EN), 【富山県】絶滅危惧Ⅰ類(CR+EN), 【石川県】絶滅危惧Ⅰ類(CR+EN), 【福井県】県域絶滅危惧Ⅰ類, 【山梨県】情報不足(DD), 【長野県】絶滅危惧ⅠA類(CR), 【岐阜県】絶滅危惧Ⅱ類, 【静岡県】絶滅危惧Ⅱ類(VU), 【愛知県】絶滅危惧Ⅱ類(VU)(繁殖), 準絶滅危惧(NT)(通過), 【三重県】絶滅危惧ⅠB類(EN), 【滋賀県】絶滅危機増大種, 【京都府】絶滅危惧種, 【大阪府】絶滅危惧Ⅱ類(VU), 【兵庫県】B ランク, 【奈良県】絶滅危惧種, 【和歌山県】絶滅危惧Ⅱ類(VU), 【島根県】絶滅危惧Ⅱ類(VU), 【岡山県】絶滅危惧Ⅱ類, 【広島県】絶滅危惧Ⅱ類(VU), 【山口県】準絶滅危惧(NT), 【徳島県】絶滅危惧Ⅱ類(VU), 【香川県】準絶滅危惧(NT), 【愛媛県】絶滅危惧Ⅱ類(VU), 【高知県】準絶滅危惧(NT), 【福岡県】準絶滅危惧(NT), 【長崎県】準絶滅危惧(NT), 【熊本県】準絶滅危惧(NT), 【大分県】絶滅危惧Ⅱ類(VU), 【宮崎県】準絶滅危惧(NT-g), 【鹿児島県】絶滅危惧Ⅱ類

保護に係る法令指定状況（令和7年度末時点）

鳥獣保護管理法

参考文献

- 出口翔大, 2017. ヒクイナ *Przana fusca* の福井市南西部における生息調査および福井県内の過去の生息記録. 福井市自然史博物館研究報告, No.64: 49-54.
- 平野敏明, 2006. 渡良瀬遊水地における繁殖期のクイナ・ヒクイナの生息状況と生息環境. Bird Research, vol.2: A35-A46.
- 平野敏明, 2010. ヒクイナ調査結果報告: 日本における 2000 年代後半のヒクイナの生息状況. http://www.bird-research.jp/1_katsudo/hikuina/hikuina2010.pdf
- 籠島恵介, 2022. ヒクイナの香川県および徳島県における越冬状況. Bird Research, vol.22: S1-S4.
- 植田睦之・植村慎吾, 2021. 自然環境保全基礎調査 全国鳥類繁殖分布調査報告 日本の鳥の今を描こう 2016-2021 年. 176pp. 鳥類繁殖分布調査会, 東京.
- 植田睦之・奴賀俊光・山崎優佑, 2023. 全国鳥類越冬分布調査報告 2016-2022 年. pp.170. 特定非営利活動法人 バードリサーチ・公益財団法人 日本野鳥の会, 東京.
- 渡辺美郎・平野敏明, 2008. 神戸市西区および稲美町一帯におけるヒクイナの生息状況. 日本鳥学会 2008 年度大会講演要旨集, pp. 41.
- 渡辺美郎・平野敏明, 2009. 神戸市西区および稲美町一帯におけるヒクイナの越冬期の生息状況. 日本鳥学会 2009 年度大会講演要旨集, pp. 110.

アセスメントサマリー (Assessment summary)

Zapornia fusca erythrothorax has been assessed for threatened wildlife of Japan Red List 5th edition. *Zapornia fusca erythrothorax* is listed as NT under criteria ①②.

The species that is considered to be under increasing pressure for survival, as indicated by habitat status trends, specifically with the following notable tendencies in parts of its distribution that are likely to continue.

①The number of individuals is decreasing.

②Habitat conditions are deteriorating.

Habitat types:	【Terrestrial/Freshwater area_Mid-altitude area, Low-altitude area】 Grassland, Farmland, Abandoned farmland, Agricultural ditch, Wetland/Marsh/Stream, Middle river basin, Reservoir/Pond 【Terrestrial/Freshwater area_Plain】 Farmland, Abandoned farmland, Wetland, Middle river basin, Lower river basin, Small river, Reservoir/Pond
Threat types:	Lake development, River development, Wetland development, Field preparation
Law designation status for conservation	Wildlife Protection, Control, and Hunting Management Act.



執筆者:	平野敏明 (バードリサーチ)
Author:	Toshiaki Hirano

公表年月：2026 年 3 月